

受講番号 18051 学校名 高知商業高等学校 氏名 島田 紫峰子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年4H 生徒数 35 名
 科目名 英語 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 New Stream I(Zoshindo)

クラスの様子・特徴

活発なクラスである。英語への興味は6割があり、必要であると8割が答え、英語授業参加意欲は、「ある」と3人「どちらかといえばある」と18人答えている。授業参加のために自分ができることとして、「メモをとる」「予習復習する」「集中する」をあげた。

問題の確定

英語で難しい点として「文法」「単語や文を書くこと」「話すこと」「英文を読んで内容を理解する」を生徒はあげている。

予備調査

A 授業の観察

活発なクラスであり、発問に対して反応もある。集中力が持続しない傾向にあるので、授業の流れとして、導入に歌のディクテーション活動を毎回行ない、動機付けにできるようにした。1学期を通して、活動は定着してきている。

B 生徒による授業評価

授業アンケートによると、英語の授業は好きかの質問に対して、「はい」5人「普通」19人「いいえ」4人。授業で、歌・文法・音読・会話・聴く・書くに力をいれてほしいという意見が多い。要望として、「楽しいわかりやすい授業をしてほしい」もある。

C 学力データ

英検3級程度のレベルから英語に苦手意識を持った生徒まで、幅広い。定期テスト結果からは、英語を書く・単語のスペルを記憶する点を強化する必要があると考えられる。

リサーチ・クエスト

英語の授業のウォームアップとして、歌のディクテーション活動が定着してきたクラスにおいて、その活動を、英語での自己表現活動につなげるにはどのようにすればよいか？

仮説・実践・検証

仮説1

歌のディクテーション活動を通して、語彙力をつけていけば、自己表現の土台になるだろう。この活動(単語レベルのタスク)の成果を目に見える形に具現化すれば意欲もわいてくるだろう。

実践1

1学期同様、ウォームアップとして歌のディクテーション活動を単語レベルで毎時間継続した。各自の正解数を目に見えるようにするために、マラソンシートを正解数ずつ毎回つけていくようにした。

検証1

この活動で、英語音声に4月から比べると慣れてきましたか？「慣れてきた」17人「まあまあ」10人「まだ」1人。言葉文化に興味を持つことができますか？「はい」13人「まあまあ」15人。英語の単語や表現の勉強になりますか？「はい」22人「ふつう」6人。マラソンシートをつけてみて、「良かった」12人「ふつう」11人「よくない」9人。この活動で自己表現の動機付けや語彙の土台の一助になっていると考えられる。

仮説2

英語の歌のディクテーション活動のタスクを単語レベルから語順やフレーズを加えたタスクにすれば、自己表現に使えるフレーズの土台になるだろう。

実践2

英語の歌の中で、大事な表現を毎回1つ取り上げ、リストにしていこうにした。タスクを単語のディクテーションだけでなく、フレーズの並べ替えの問題も入れるようにした。

検証2

フレーズ並べに関しましては、「単語より難しい」15人「どちらかわからない」8人であった。表現リスト作業は、クラスの3分の2は、「勉強になる」と答えたので、表現学習の助けになっていると考えられる。

仮説3

歌の活動で作成したリストの表現を活用できるように自己表現の課題を設定すれば、自己表現のできる範囲が増えるだろう。

実践3

自己表現活動の課題はMy favorite ()というタイトルにした。各自、()内は好きな人・事柄を選んだ。条件は、6文以上・リストの表現の1つを活用して最後に付け足すこと・好きな人や事柄を他人に紹介している文であることにした。添削は英作のヒントをメモして返却し、2回目それをヒントに提出する形をとった。また、レポートに紹介する人/事柄の写真や絵も添付するようにした。

検証3

自己表現課題を通して、英語の歌の活動で勉強した単語やフレーズ表現などは役に立ったと思いますか？「はい」17人「どちらかといえばはい」6人「何とも言えない」5人「いいえ」1人。今後も自己表現したいですか？「はい」13人「どちらかといえばはい」10人「どちらかといえばいいえ」4人「いいえ」1人。アンケート結果から英語での自己表現のきっかけ作りはできたと考えられる。

研究の成果

この活動が、動機付けになり、単語や表現・リスニングの勉強になってきているということは成果である。教科書以外の活動を通して、英語で表現するきっかけを提示できたことも成果である。自己表現課題に取り組んでみて、生徒たちの英語表現に確実に歌の活動が結びついているかについては断言できないが、英語で自己表現できるという自信や3学期や2学年への動機付けになったであろうと考えている。

今後の授業改善の課題

今後の課題は、この活動を自己表現へつなげる各到達度ステップをもっと細かく考えていくことである。この活動を始めたきっかけは、4月当初、授業への集中を高めるためのものであったが、この活動が終わった後の学習(教科書の作業)に大きく影響して、よい相関関係がでていたとは断言できない。そのため、歌の活動後の授業方法の工夫や授業規律の徹底・ペアワークでのルール作りなども今後考えていかなければならない。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-844-0267

電子メール

shihoko_shimada@kt3.kochinet.ed.jp